

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

最終報告提出日:2012年9月7日

・派遣生基本情報

所属:東京大学文学部言語文化学科言語学専修課程3年

氏名:梅田 遼

派遣形態:個人派遣・学部

・研究課題名

ソルブ語文章語の歴史におけるドモウィナの役割——東ドイツ時代を中心に

・派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名:ドイツ連邦共和国

都市名:パウツェン

研究機関名:Sorbisches Institut

(2) 派遣期間

出発日:2012年7月26日

帰国日:2012年8月24日

総日数:30日

・主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

ドイツ国内に存在するスラヴ系少数民族であるソルブ人の言語, ソルブ語の文章語発達の歴史において, ソルブ人コミュニティー「ドモウィナ」が果たした役割について, 文献収集を主とした調査を行う。とりわけ, 東ドイツ時代におけるその出版活動に注目する。また, ソルブ語文章語の二つのヴァリエントである上ソルブ語と下ソルブ語が, 東ドイツ時代においてどのように扱われていたかについても調査する。

(2) 実際に達成された成果

Sorbisches Institut (ソルブ・インスティテュート) が主催する3週間のソルブ語・ソルブ文化夏期講座に参加し, ソルブ語の研鑽を積むとともに, インスティテュート付属のソルブ中央図書館にて文献収集を行った。

文献収集はソルブ語文章語の歴史と東ドイツ時代の言語政策という2つのテーマを中心として行った。本研究は、この2つのテーマにまたがるものであるが、言語史と言語政策を関連づけた研究はほぼなく、文献収集は困難を伴った。

当初の計画では最も大きなソルブ人コミュニティー「ドモウイナ」の活動に絞って調査する予定であったが、調査を進めていくうちに、ソルブ語の発展には他にも様々な団体が寄与していたことが分かった。とりわけ、Maćica Serbska(ソルブ人の学術団体)およびその言語評議会の活動は注目に値するものである。これらの団体についても文献をいくつか収集した。

上ソルブ語と下ソルブ語という2つの文章語が存在する経緯については、20世紀以前までの歴史についてまとめた文献は多いものの、20世紀以降について述べられたものは大変少なく、満足のいく文献調査ができなかった。

### (3) 今後の研究展望

20世紀以降のソルブ語の発展について、東ドイツ時代の言語政策に重点を置きながらまとめたいと考えている。今回の文献調査を通じ、重要な役割を果たしたのはドモウイナだけではないことが明らかになったので、他のソルブ人コミュニティーの活動も視野に入れつつ調査したい。とりわけ、言語評議会の活動と、それによって行われた正書法改革について、より深く調査する予定である。また、ドモウイナの出版活動について、1958年以降に刊行された書物のビブリオグラフィーを基にして、まとめたいと考えている。